

江戸



▲香水箱

### 背景

四国の中でも特に雨が少ない香川県では、現在のように香川用水ができて吉野川から水が供給されるまでは、満濃池に代表されるため池が多く造られ、水不足に備えていました。池の水が少なくなると、たいていの土地では、できるだけ渇水被害を小さくするため、池の水を順番に配水していく「番水」が行われていました。しかし、時計のない時代に、公平に田に水を引くためには工夫が必要でした。そこで使われたのが「香箱」です。香箱で線香を燃やして、決めた長さごとに太鼓で合図をして引水を交代していたのです。

### アクセス 平池

- JR高松駅より南へ直線距離約9km
- 高松市仏生山町
- 緯度経度 北緯34度16分17秒, 東経134度02分43秒



時計のない時代に、少ない水をできるだけ公平に田に引き入れるために、人々は工夫をしました。高松市の多肥では、平池の用水配分に、大正の頃まで、香を焚いて水の配分をしていました。長さ六〇センチメートル、横三五センチメートル程の香箱の中に灰をつめ、中に竹節を欠いた二つ割の竹を三個、箱の長い方に平行させて置き、その竹樋の中に線香の粉を入れ、その粉に火をつけ、その燃えて行く寸法を測定して、田の給水時間を決めたものです。

香を焚く時には、人手が最低限三人は必要でした。二人は民家において香を焚いた香箱を見つめます。時間が来ると、太鼓で合図をします。もう一人は股守（水路の切り替え）に出掛けます。これを「水ばし」または「井手ばし」と呼びました。これに当たった者は枕蚊帳などを持参して水路の端で待機をしていました。太鼓の合図にこたえて股守に出た「井手ばし」はあらかじめ持参をしている鉦をたたいて「わかった」と合図をします。そして、水路を切り替えて次の田に水を流しました。

こうして、平池の用水が流れるようになると、順番に田に水を引き入れるために、香箱の中で香を焚いたものでした。

